

2 期

二〇二五年度 中学校入学試験問題

国
語

- 1 問題用紙は開始のチャイムが鳴ってから開いてください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 受験番号と氏名は解答用紙と問題用紙に記入してください。どちらも集めます。
- 4 。、「」などは一字に数えます。
- 5 試験時間は50分です。

受 験 番 号

--	--	--	--

氏 名

--

〔一〕

次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 次の――線の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。送りがなが必要な場合は、ひらがなで書きなさい。

- 1 人道的支援の道を探る。
- 2 費用を工面して車を修理した。
- 3 大まかな骨子を示した。
- 4 横着せず、地道に努力する。
- 5 ガイロジュが美しい。
- 6 目標達成のために誘惑をシリゾケル。
- 7 試合会場が熱気をオビル。
- 8 世界王者としてクンリンしている。

問二 次の会話文を読んで、後の問いに答えなさい。

佐藤先生

「もしもし、木村さんのお宅ですか。」

ふたばさんの母親

「はい、そうです。」

佐藤先生

「わたくしはふたばさんの担任の佐藤です。ふたばさんは【① いる】ますか。」

ふたばさんの母親

「先生、いつもありがとうございます。ふたばは【② いる】ますので、少々お待ちください。」

ふたばさん

「お電話代わりました、ふたばです。」

佐藤先生

「ふたばさん、佐藤です、こんにちは。実は学校宛てに作文コンクールの優秀賞に入賞したお知らせが届きましたので、連絡【③ する】しました。おめでとうございます、日頃からの努力が実ってよかったですね。」

ふたばさん

「お忙しい中ご連絡くださり、ありがとうございます。うれしいです。」

佐藤先生

「表彰式は、冬休み明けに市の大ホールで行われますから、【A】お家の方とご一緒に出席してくださいね。」

ふたばさん

「はい、わかりました。【B】両親に報告し、出席したいと思います。」

1 【①】 【③】 の語を敬語に直して書きなさい。①は六字、②は二字、③は三字で答えること。

2 【A】 【B】 に当てはまる語として、最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア いつも

イ いよいよ

ウ さつそく

エ ぜひ

オ まさに

問三 次の1～4の に入る語を、「」の意味になるように、後のア～コの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

1 「雪がちらつく様子」

…雪が

2 「海が荒れた様子」

…海が

3 「新芽によって明るく色づく山の様子」

…山

4 「青葉若葉を吹きわたる初夏の風の様子」

…風

ア	匂 ^{にお} う	イ	薫 ^{かお} る	ウ	泣 ^な く	エ	怒 ^{おこ} る	オ	眠 ^{ねむ} る
カ	歌 ^{うた} う	キ	走 ^{はし} る	ク	舞 ^ま う	ケ	触 ^ふ れる	コ	笑 ^{わら} う

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。、「」などは一字に数えます。

大学三年生の青山霜介は、湖山先生のもとで水墨画の腕を磨いています。青山は亡き母が生前勤めていた小学校から、水墨画教室の講師を頼まれました。今日は、シイタケの絵を指で描くというテーマで授業を行っています。

いつのまにか子どもたちの中に、年配の女性が一人交じって指墨を始めている。年季の入ったデニム地のエプロンを着けていて大量の染みや汚れがついている。ペンキか絵具か墨か、ともかく夥しい汚れが模様に変わっているエプロンだった。他のクラスの先生かもしれない。僕が驚いて見つめていると、

「青山先生、私も教えて下さい」

と品のよい声で促された。状況はよくわからなかったが、子どもたちに与えているものと同じような助言を彼女に与えることにした。

「形は思うままに描いて下さい。この通りじゃなくてもいいんです。描きながら、楽しそうだと思うほうに手を動かして下さい。新しいやり方をみつけたら、それを試してみして下さい。紙はいっぱいあるんだから」

そんなことを、相手の動きを見ながら伝える。彼女は絵画の心得があるようで、目の前にあるシイタケの形を意識して綺麗に描いていた。その分、線に少し面白みがない。器用すぎるのだ。僕はシイタケを取り上げた。彼女は驚いた。僕は微笑んだ。

「形ではなくて、心に浮かんだものを、今度は描いて下さい」

そう言うと、彼女は大きく微笑み、

「青山先生、ありがとうございます」

と深く頭を下げた。僕はその仕草にあたふたしてしまった。驚いた僕を視界から外し、彼女は描き始める。僕はその姿を見て取り、次の席に移動した。目の前に、大苦戦を強いられている子がいた。

水帆ちゃんだ。

手が止まっている。何枚か描いたようだけれど、どれも小さく生き生きとしていない。僕が傍^{そば}に来たときも首を傾^{かたむ}けて、つまらなそうに紙を見ていた。僕は彼女の目線に目を合わせるため屈^{かが}んだ。

「水帆ちゃん、どうしたの？」と訊^{たず}ねると、Aをひそめた。話す気はないようだ。筆を持てないことと、うまくいかないことがつまらないのかもしれない。

「指墨画は面白くないかな」コクンと頷^{うなづ}く。「どうして？」と訊ねると、

②「きれいな線じゃない」と言った。僕は思わず微笑^{えいごう}んでいた。この子の心は絵師なのかもしれない。

「僕も最初はそう思った。でも指墨画をやっているうちに、これは絵を描いていく上ですごく大切なことをいっぱい勉強^{べんきやう}できるとあつて思ったよ。先生と一緒に^{いっしょ}に少しだけ描いてみよう」

彼女はまた無表情のままこちらを見ていたけれど、C僕が微笑^{えいごう}むとやっと頷^{うなづ}いてくれた。

「じゃあまず普通に描いてみよう」

僕は彼女の前にシイタケを置いた。彼女はそれをじっくりと観察したあと、指先に墨^{すみ}を浸^ひけるとサッと線で描いた。面白くない円と軸^{じく}が二筆で描かれた。他の彼女が描いたものとはほぼ同じだ。

「同じ」彼女はボソツと言った。つまらない、という意味だろう。たぶん物足りないのだ。あれだけ筆を使う楽しみを感じていた子なら当然かもしれない。

「じゃあ次に、ちよつと手を洗つてみて」

僕は筆洗^{ひっせん}に入^いった綺麗な水で手を洗うように指示した。真新しい布巾^{ふきん}で水分^{みづぶん}を拭^{ぬぐ}い、指先はさっきよりも綺麗になった。

僕はシイタケを手渡^{てわた}した。

「指先で触^{さわ}ってみよう」

彼女はBをかしげた。何を言っているんだ、という表情だった。そして、

「見たものを描くんじゃないの？」と訊ねた。

僕は首を振^ふった。

「目で見たものを描くなら、見てるだけでいい。でも、手で触^ふれた感^{かん}触^{しよく}はどうやって描く？」

③しばらくして、D彼女はハツとしたように言った。彼女は瞳^{ひとみ}を輝^{かがや}かせながら、

「手で触る」とはつきり言った。その答えが欲しかった。^d僕は本当に微笑んだ。子どもと一緒にいるときにだけ現れる『伝わる』という感覚だった。

「そうだよ。手で触った感触を描くには、触るしかない。目で見たものだけが、絵になるんじゃないんだ。形だけが絵になるんじゃないんだよ。目には見えないものさえ絵になるんだ」

彼女はうんうんと何度も頷き、シイタケに触れた。小さな指先で、襷に触れ、笠に触れ、軸に触れ、石づきに触れた。笠の周囲のでこぼこに触れたとき、大きく目を見開き、光にかざしてシイタケを全体から眺めた。

これこそが、おそらく子どものころの湖山先生が師に指墨を遊びとして授けられた意味なのだろう。彼女はもう一度、シイタケの全体に触れる。すると、こちらを見向きもせず指に墨を浸けて絵を描き始めた。

絵が変わった。

(注1) 筆致は遅くなり、墨つぎは増え、線はでこぼこになった。形はさつきよりも歪で、整わなくなった。けれども、さつきよりも面白味があり、生き生きとしたものになった。

僕は微笑んだ。

^④ 彼女はさらにそこに水を足して、墨をボケさせ、笠を完成させると軸を描き、濃墨で、軸の切れ目の石づきを塗った。墨面にかすれを与えるために布巾に墨を吸わせることまで思いついていた。

絵には明らかに形以上のものが描き加えられていた。形を超えたものを表現しようとしていたといってもいいかもしれない。彼女の感覚が絵の中にはあった。

「手で触れてみてどうだった？」と僕は水帆ちゃんに訊ねた。すると、

「でこぼこだー」と、また大きな声で答えた。僕はまた嬉しくなった。これまで感じたことのない喜びだった。

簡単な言葉だけれど、そうじゃない。彼女が描いたのは、でこぼこ以上のものだ。そして彼女が指先で触れて感じ取ったものは、言葉にはしようのない複雑な感覚や、もつといえど生命感そのものだ。^⑤ ^⑥ したが、瞬く間に、小さな指先から絵になった。

それを描出しようとするので、より深く感じ取り、一つにまとめようとするので新たに感覚を生み出す。惜しみなく、彼女はそこに注ぎ込まれていく。それは、絵を描く喜びだった。喜びがたった一個のシイタケに溢れていた。^(注2) この直截性は、

筆ではとても再現が難しい。けれども、指先なら誰でもが達人のような感覚で描くことができる。

「氣韻生動……」と僕の口から、思わず言葉がもれた。

「きいん、せいどう……？」と彼女は言葉を繰り返す。その拙い声の響きが、また僕に大切なことを教えてくれた。

「言葉なんてどうでもいいんだよ。生き生きとした線を引くことや絵を楽しむことが、一番大事だってことだよ。僕も昔、それを教えられたんだ。ずっと忘れていたけどね」

「先生でも忘れることがあるの」

「忘れちゃうよ。どんな大切なこともね」

彼女が澄んだ瞳でこちらを見て微笑んだ。大人が微笑むときのようだった。彼女の知性が微笑んだのかもしれない。

「じゃあ、私がときどき思い出させてあげるね」

彼女がその日一番、優しく微笑んだ。突然、光芒に射られたような眩しさに目を細めた。微笑んだり、頷いたりしな

ければならない。彼女は待っている。けれども、何も言えない。

不自然なほど彼女を待たせた後、

「ありがとう」と僕は小さな声で言った。

なぜだか、涙が堪えられなくなった。そして、上を向いて大きく息をした。呼気が震えていた。母さんは、ずっとこんな

な仕事をしていたのだ。

この時間の中に、母さんは生きていたのだ。

(砥上裕将『一線の湖』による)

(注1) 筆致……絵などの描きぶり。

(注2) 直截……じかに、そのまま、直接。

(注3) 光芒……光のすじ。

問一　　~~~~線㉞「年季の入った」・~~~~線㉟「心得がある」の本文中の意味として、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

㉞　年季の入った

- ア　使い込まれた
- イ　季節に合った
- ウ　お気に入り
- エ　時代おくれ
- オ　うすっぺらい

㉟　心得がある

- ア　品格がある
- イ　才能がある
- ウ　たしなみがある
- エ　道具を持っている
- オ　資格を持っている

問二　　——線①「僕はその仕草にあたふたしてしまった」とありますが、なぜですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア「ありがとうございます」とは言われたものの、自分が責められるような雰囲気を感じてしまい、どぎまぎしたから。
イ　自分は頭を下げられるようなことは何もしていないのに、突然女性に謝罪されたことで、とまどってしまったから。
ウ　水墨画を描くうえで当たり前のことを伝えただけなのに、年上の女性に丁寧^{ていねい}に感謝されて、その反応に驚いたから。
エ　人と関わることが苦手で水墨画家になったのに、絵画教室で他人と密にかかわることになり、苦しさを感じたから。
オ　年上の女性に深々と頭を下げられ、あまり接することのない世代の人を前に、どうしたらよいかわからなかったから。

問三

 ・

 には体に関する語が入ります。当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|----|---|
| ア | 〔 A | 眉 <small>まゆ</small> | B | 小首 | 〕 |
| イ | 〔 A | 身 | B | 頭 | 〕 |
| ウ | 〔 A | 肩 <small>かた</small> | B | 小首 | 〕 |
| エ | 〔 A | 肩 | B | 頭 | 〕 |
| オ | 〔 A | 眉 | B | 小耳 | 〕 |

問四 — 線② 「『きれいな線じゃない』と言った」とありますが、このときの水帆の気持ちとして、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 水帆は絵があまり得意ではないが、上手な絵を描きたいという気持ちだけは人一倍強かったため、きれいに描けない自分にいらだちを感じている。
- イ 水帆はいつも絵を描くときに、きれいな線で描くことに喜びを感じていたため、筆ではなく指で納得のいくように描けずやる気を失っている。
- ウ 水帆には絵に対する強いこだわりがあり、単純な作業を素直に楽しめていないので、指で高度な絵を描くように無理強^じいされてふてくされている。
- エ 水帆は素晴らしい絵を描いているにも関わらず、自分に対する評価が厳しいため、絵の仕上がりに納得ができずやるせなさを感じている。
- オ 水帆は将来画家になると心に決めていて、それ以外のことには価値がないと考えているので、指墨のようなことは時間の無駄^{むだ}だと感じている。

問五 — 線③「彼女はハツとしたように言った」とありますが、水帆はどのようなことに気づいたのですか。わかりやすく説明しなさい。

問六 — 線④「彼女はさらにそこに水を足して、墨をボケさせ、笠を完成させると軸を描き、濃墨で、軸の切れ目の石づきを塗った」とありますが、このときの水帆の様子を説明したものととして、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 指を水できれいに洗ったことで、指の感覚がいつも以上に研ぎ澄まされて心も清らかになっている。
イ 指のするどい感覚を使うことで、墨の濃さが一定になっていく心地よさに心が惹きつけられている。
ウ 指でじかに触れることでシイタケの形を知り、笠や軸のつくりのめずらしさに興味を持っている。
エ 絵を描く指でシイタケを触ることで、シイタケ自体にも墨がついていくことを楽しく思っている。
オ 指を使って絵を描くことによって、シイタケに触れた感触まで絵に落とし込むことに熱中している。

問七 — 線⑤「それが、瞬く間に、小さな指先から絵になった」とありますが、「それ」とは何ですか。文章中から三十字以内で探して、はじめと終わりの五字をぬき出して答えなさい。

問八 — 線⑥「絵を描く喜びだった」とありますが、ここでいう「絵を描く喜び」とはどのようなものですか。わかりやすく答えなさい。

問九 ― 線①～⑤のそれぞれの「微笑み」の説明として、適切でないものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ― 線① 「僕は微笑んだ」では、シイタケの形を意識して作品を描いた女性に対して、「僕」が内心いらいだちを抱えながらも優しくふるまおうとしている。

イ ― 線② 「彼女は大きく微笑み」では、「彼女」が大人の自分にも絵を描く楽しさを指導してもらえたことに対して、感謝の念を抱いている。

ウ ― 線③ 「僕が微笑む」では、「僕」が水帆の警戒心を解くことで、指墨がつまらないという思い込みを拭えるように導こうとしている。

エ ― 線④ 「僕は本当に微笑んだ」では、「僕」が水帆に教えた描き方を水帆がきちんと受け止めてくれたことを感じ、心から喜んでいる。

オ ― 線⑤ 「彼女がその日一番、優しく微笑んだ」では、絵を描くうえで大切なことを「僕」に教わった水帆が、それを忘れずにいることを示そうとしている。

問十 ― 線⑦「涙が堪えられなくなった」とありますが、なぜですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 水帆に対して自分が伝えたいことを伝えるまでに時間と手間がかかり、同じ仕事をしていた生前の母の苦勞が思われて、尊敬の気持ちが高み上げたから。

イ 短い間に自身の絵を成長させた水帆とは対照的に、彼女の言葉に何も返せない自分を情けなく感じ、天国の母にも叱られると感じたから。

ウ 自身の至らなさを優しく励ましてしてくれる水帆に対し、生前母が自分を厳しくも優しくしつけてくれた姿を思い出し、懐かしく感じたから。

エ 自分の伝えた以上のものが子どもから返ってくるということを、母も生前経験していたのだとしみじみと実感して、心が揺さぶられたから。

オ ふてくされていた水帆が、大人びた微笑みを返すまでに成長したのを見て、母が自分を辛抱強く育ててくれたことへの感謝が高み上げてきたから。

〔三〕

次のⅠ・Ⅱは同じ本からの文章です。これらの文章を読んで、後の問いに答えなさい。
注意。、「」などは一字に数えます。

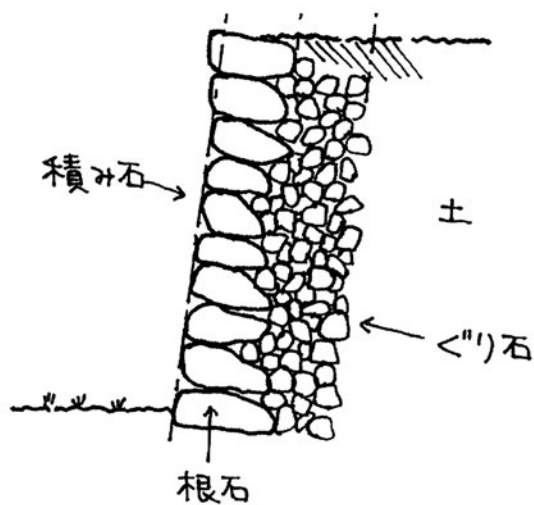
図 1



図 2



図 3



Ⅰ レクチャーは、「石積み」という日本の斜面地しゃめんの田んぼや畑さふだじゆんこ（図 1・図 2）を作るための伝統的な農業技術について、「石積み学校」の活動を始めた真田純子さんが語った内容です。真田さんは、セメントなどの接着剤ぎやくざいを使わない「空石積み」（図 3）の仕組みを守る活動をしています。

Ⅱ ディスカッションは、Ⅰを聞いた政治学者の中島岳志なかじまたけしさんと建築家の吉村有司よしむらゆうじさんが、真田さんと話し合いをした内容です。

I レクチャー

日本の石積みが廃れつつある理由

地元の人たちの話を聞いても、空石積みは消えつつあって、理由は、二つ挙げられます。一つは、技術の継承ができていないこと。もう一つは、修復や維持管理のための労働力が足りていないこと。石積みが多く用いられる棚田や段畑は、傾斜がある土地につくられますが、そうした中山間地域の農村は、ほぼ例外なく過疎化や高齢化が進んでいます。^(注1)

では、お金をかけたら課題は解決するのか、というとそんなに簡単な話でもなくて、一般的な土木の施工業者は空石積みをやりがりません。なぜかというと、構造計算が難しいこともあって、施工基準がないんです。施工基準がなければ、技術者本人の責任でやらざるをえず、¹ 石積みが崩れてしまっても、技術者の腕が悪かった、という話になりかねません。加えて、現在の日本の制度では、施工基準がないために、修復のための補助金をもらうのが難しいという事情もあります。

「石積み学校」という仕組み

「石積み」と聞くと、お城の石積みなどを想像して、熟練した職人だけが積める難しい技術なんじゃないかと思うかもしれません。² 日本各地に石積みの棚田や段畑があることを考えると、昔はふつうの技術だったわけです。なので私は、そのふつうの技術を、継承していきたいと考えて、石積み学校などの取り組みをしています。

石積み学校を立ち上げるにあたって、ボランティアでやったり補助金に頼ったりするのではなくて、お金のやりとりも入れて、持続できる仕組みにしたいと思いました。中心になっている人の意志に依存してしまうと、その人が地域を離れたら続かない、となってしまう。それでは地域に対する責任を果たせないため、一つの職業にすることをめざしました。

具体的には、石積みを習いたい人と石積みを通してほしい人を、石積み学校が情報の集約をしてマッチアップしたり、^(注3) ワークショップを企画したり、講師が自治体などに教えに行ったり、ということをしています。習いたい人からは参加費も

徴収^{ちゅうしゅう}していて、地域活動でお金をとるというのは、開始当初は珍^{めづら}しかったのですが、最近は増えてきているみたいでよかったです。と思います。

いろんなところから講師の声かけをいただけるのも、特定の場所でボランティアベースではなくて、参加費を設定して学校としてやってきたからなのかなと思います。

それと、田植えボランティアに関わっている方から、「手伝いに来てくれるのはいいけど、下手だから後で全部植え替^かえているんだけど、参加者にどう伝えればいいのか？」と訊^きかれたことがあるのですが、石積みではそれは起こっていないですね。そのとき、ボランティアだと「農村部は困^{こま}ってるから助けてもらっている」という構図が定着してしまうのかもしれないと思いました。

それが固定されてしまうと、そこで育った子どもたちが自分たちの地域に自信が持てなかったりもする。お金を介^{かい}して対等な価値の交換^{こうかん}としてやるのは、そういう意味でも大切だと思っています。

石が技術を選ぶ

ここからは、継承する技術についてお話ししたいと思います。^③ 石積みは、地域によつて異なる特徴^{とくちょう}をもっているのですが、なぜそうなるのかから考えてみます。

農村の人々にとって、農業は生活を支えるための手段で、なるべく余計な労力を使わないことが重要です。これは石積みにおいても同じで、生きるための仕事の一つであり、農業を行うために平地をつくることが目的であつて、立派な石積みをつくるのが目的ではありません。体力を温存しながら効率よく積み技術は、農村での暮らしを支える知恵^{ちえ}です。

具体的にはたとえば、材料は近場から調達し、石の整形はなるべく行わない。基本的にどんな石でも使います。修復するときは、もともと使っていた石を再利用して積み直すこともできます。

石はその土地の地質に依存していて、石の割れ方や割れたときの形は、その石質に依存する。ということは、まず使う石に地域性が出ますし、使う石の形にふさわしい積み方をする事で、結果的に、つくられる壁^{かべ}にも地域性が出てきます。

あるとき、イタリアの北部で学生と一緒^{いっしょ}に石積みをしたことがありました。そこで採れる石は、層状にミネラルが入って

いて、そこから割れるので、自然に割れた石が平たい形をしています。でも、作業を始めると、昔、氷河に乗ってやってきた別の地域の石も混ざっていて、丸っこい石もたくさん出てきたんです。石積みを教えてくれた人が、地元で採れる平らな石の積み方しかできないと困っていたので、「丸い石だけを使って日本の積み方で積んでいいか」と聞いたらOKが出て、イタリアと日本のハイブリッドな石積みになりました。

この光景をみて、その地域を研究している建築家、アンドレア・ボッコ先生が「石が技術を選ぶ」とおっしゃいました。その表現がすごくおもしろくて、「『技術』ってそもそもなんなのか」、ということも考えるようになりました。

農学者、津野幸人^{つのゆきひと}らの共著『自然と食と農耕』にある「農業技術の成立^{なりた}ちと発展」という章によると、「技術」を意味する言葉が初めて使われたのは、一八七〇年の西周^{にしあまね}の『百学連環^{れんかん}』だそうです。そして、近代工業の輸入と同時に「技術」という用語が生まれたのは示唆^{しさ}的だ、と書いてあります。江戸時代^{えど}までは、「わざ」や「うで」「てだて」「だんどり」「すべ」「まわし」といった技能や工程が、それぞれ別個のものとして認識されていたのが、一緒にたに「技術」と呼ばれるようになることで、^④「技術」が何を意味するのか、曖昧^{あいまい}になってしまったと。

私が二〇〇七年に石積みに出会ってから積む経験を重ねて、「少しずつ『技術』が上がった」と言うこともできますが、紐^{ひも}解^といていくと、そうした技術は全部、「だんどり」とか「まわし」「うで」と言い分けられます。

そして分けて考えてみると、整った石で壁をつくるのが技術の進展なのではなくて、いかにその石と現場を読むか、その地域で採れた石に自分がどう対応するかが、重要なのだとわかります。

人間がどう積みみたいか、ということよりも、その場その場に自分をどう合わせるか。まさに「石が技術を選ぶ」だなと思っています。

石の調達	a	だんどり
現場管理	^{むだ} 無駄な作業や動線が生まれないよう、現場をつくる能力	まわし
石の移動	道具をうまく使う能力（道具の開発）	わざ、うで
石の見極め	石の顔を見る、 ^{ふさわ} 相応しい石を選ぶ、置き方を判断する能力、 次の石のことも考える能力	わざ、うで
現場対応力	b	すべ、てだて

農地の石積みの技術の本質とは



イタリアと日本のハイブリッドな石積み

Ⅱ ディスカッション

石やミツバチの側から考える

中島 土木という、もつとも設計的な問題が強いジャンルの中で、「石」を起点に考えて統御(注6) とうぎよを手放していく。人間のほうが石のあり方に沿いながら、何かがつくり上げられていく点が非常におもしろかったです。

それは、私がこれまで対話を重ねてきている、料理家(注5) どいしはるの土井善晴さんがおっしゃる料理論と、ものすごく近いと思いました。土井さんは、レシピをどんどん手放そうとしていくんですね。今日買ってきたトマトはフレッシュか完熟かによって、あるいは採れた場所によって、その調理法は変わっていくからです。素材を見て、その素材と自分の気持ちや、その日の天候とかいろいろなものが合算されて、目の前の料理ができていくと考えます。

真田さんは、そうした石積みの技術、あるいはそこから得られた職人的な叡智(注7) えいちは、世界のあり方とどうつながっていくとお考えですか？

真田 「石積み」という伝統技術を通して今の土木技術を見ると、明治時代以降、基準を設定して、その基準に材料を当てはめながら、一定の強度や安全性を保つという考え方が、ずっと積み重ねられてきたことを実感します。

最近、自然物を活用しながらインフラ(注8)を整備する「グリーンインフラ」への注目度が高まっていますが、これまでの仕組みに自然物を入れればよいということではないと思います。基準に頼った考え方を根本的に変えなければ、今後の持続可能な社会はつくれないのではないかなと思っています。

吉村 僕は、もともと生物にすごく興味があって、都市は人間だけのものではないと思っています。都市にも動物や昆虫がいますよね。そう考えると、われわれは人間視点で都市をつくり過ぎてきたのではないか、という思いがあります。

たとえば、僕たちが口に入れている食料の大部分は、ミツバチの受粉のおかげで育っていると言われています。資源が循環(注9)することでシステムが成り立つ、サーキュラーエコノミーの一つともいえます。そう考えると、ミツバチにとっていい環境や都市をつくるのが、回り回ってわれわれの生活の質も上げてくれるかもしれない。だから、人間以外の主体に着目して、「石が技術を選ぶ」、そしてその石垣(注10) いしがきから地域性を発見するという真田さんの考え方は、強く賛同するところです。

（未来の人類研究センター編『RITA MAGAZINE テクノロジーに利他はあるのか?』所収

真田純子「石やミツバチから土木を見ると?」による）

（注1） 中山間地域……山間地やその周りの地域など、地理的条件が悪く、農業をするのに不利な地域。

（注2） マッチアップ……組み合わせること。

（注3） ワークショップ……体験型の講座。

（注4） ハイブリッド……異なる二つのものが組み合わさったもの。

（注5） 示唆……それとなく示すこと。

（注6） 統御……思い通りに扱うこと。

（注7） 叡智……優れた知恵。

（注8） インフラ……産業や生活の基盤^{きばん}。

（注9） サークュラーエコノミー……循環型経済と呼ばれる、経済システムを表す言葉。

問一 ― 線①「空石積みは消えつつあって」とありますが、空石積みが消えつつあるのはなぜですか。その理由を説明した次の文章の A ・ B に当てはまる言葉を、それぞれ文中から指定の字数でぬき出して答えなさい。ただし、Bについては、はじめと終わりの三字を答えなさい。

石積みを作るための A (五字) ができておらず、また、 B (十四字) が不足しているから。

問二 1 ・ 2 に当てはまる語として最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア ところで イ もし ウ つまり エ だから オ すると カ しかし

問三 ― 線②「石積み学校などの取り組みをしています」とありますが、なぜ筆者はそのような形の取り組みにしたのですか。その理由として最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 石積みを習いたい人が増え、自治体から学校開設の要請ようせいがあつたため。
イ ボランティアを介して、人手不足に困っている農村部の人たちを助けるため。
ウ 技術を習得する対価として参加費ちやうしやうを徴収し、石積み修復の資金とするため。
エ 子どもたちが、自分たちの地域の学校に自信を持って通えるようにするため。
オ 石積みを一つの職業として確立させることで、持続可能な形にするため。

問四 ― 線③「石積みは、地域によって異なる特徴をもっている」とありますが、なぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 — 線④ 「技術」が何を意味するのか、曖昧になってしまった」とありますが、石積みの技術の本質を【表】のよう
にまとめた際、
a ・ b
に当てはまる言葉を【選択肢】の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

【表】

石の調達	a	だんどり
現場管理	無駄な作業や動線が生まれないよう、現場をつくる能力	まわし
石の移動	道具をうまく使う能力（道具の開発）	わざ、うで
石の見極め	石の顔を見る、相応しい石を選ぶ、置き方を判断する能力、 次の石のことも考える能力	わざ、うで
現場対応力	b	すべ、てだて

農地の石積みの技術の本質とは

【選択肢】

- ア その土地の地盤に合わせて、道具を用意する能力
 イ 評判のいい石を見抜き、遠方から取り寄せる能力
 ウ 土の壁が崩れた、水が出てきた、石が少ない、などの事態に対応する能力
 エ 積む場所に対してどのくらいの石が必要か見極める能力
 オ どのように石を整形するかを判断する能力

問六 —— 線⑤ 「料理家の土井善晴さんがおっしゃる料理論と、ものすごく近い」とありますが、この「料理論」の考え方と、「石が技術を選ぶ」という考え方と、どのような点が共通していますか。共通している点を答えなさい。

問七 —— 線⑥ 「ミツバチにとっていい環境や都市をつくることが、回り回ってわれわれの生活の質も上げてくれるかもしれない」とありますが、何かにとっていい環境をつくることで人間の生活の質が上がる例として、適切なものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 河川^{かせん}上流の森を手入れすることで、干潟のアサリやシオマネキが豊かに生息し、優良な漁場を守ることができる。

イ 自然優先の環境管理により豊かな土壌が保たれ、子どもたちは土遊びができ、自然と身近にふれあうことができる。

ウ 日本に生息していない生物を積極的に国内に持ち込むことで、生態系の多様さを日本にいながら見ることができる。

エ 里山を適切に維持することで、鳥獣^{ちゅうじゅう}と人間とのすみ分けが進み、人々は安心して農業や生活を営むことができる。

オ 河川の環境を守ることで、その土地に昔から棲^すむ魚が生き生きと川を泳ぎ、美しい風景を未来にも残すことができる。

問八 —— 線「基準に頼った考え方を根本的に変えなければ、今後の持続可能な社会はつくれないのではないかなと思っています」とありますが、世の中には人が作った枠組^{わくぐみ}を取りはらって考えることで、無理なく続けることができるようになるものがあります。このように「基準」を変えることで「持続可能」になるものには、どのようなものがありますか。あなたの意見を述べなさい。

